

日本には、緑にまつわる伝統的な行事がたくさんあります

「春・夏・秋・冬」季節の行事を通じて、生活の中に緑を演出してみませんか？

仲秋の名月／月見



昔、農民は収穫期にあたる仲秋の名月に、その年に取れた作物を備え五穀豊穡を祝いました。月見団子や収穫した作物を三方にのせて秋の七草と共に供え、稔りの秋を祝ったといわれています。“お月見”は、古来から日本の伝統的行事として親しまれていたのです。

豆知識

正月 7 日に食べる“七草粥”

季節を表す代表的な草花に、春の七草があります。1月7日に食べる七草粥は、新年に若菜を食べる中国の習俗と、平安時代1月15日に官中で行われていた七種の穀物＜米、粟、黍、稗、胡麻、小豆、菰米＞の粥を食べる日本の行事とが結びついて生まれました。1200年経った今日まで、その風習はしっかり息づいているのです。

桃の節句



中国では上巳の日(3月3日)に川で身を清めて不浄を祓う習慣がありました。これが平安時代に日本に伝わり、紙でつくった人形に穢れを託して川や海へ流す「流し雛」が行われるようになります。この人形が精妙なものとなり、今日に伝わる日本の代表的な行事となったのです。



写真

(中央)：横浜市 環境創造局よこはま・ゆめ・ファーマー文化祭報告

(右)：横浜市 港南区の花暦

出典：日本を楽しむ年中行事 三越

コラム

季節を味わう行事“五節句”

“節句”とは、中国から伝わった暦の上の習慣で、そのうち5つを江戸時代に幕府が公的な行事として決めました。五節句は季節の草木に関連し、それらを神に供え、食することで邪気を払いました。七草の節句、桃の節句、菖蒲の節句、七夕祭り、菊の節句。各々の節句の由来や植物について調べてみると、新たな発見があるかもしれません。



盆栽は四季を感じることでできる日本の伝統文化です。

ミニ盆栽なら玄関やリビングに飾って手軽に癒し空間を演出できます。



ふつう盆栽といえば男性が両手で抱えるほどの大きさで、何十年もかけて理想の形に仕上げていくものですが、現代の社会ではもっと短い期間で仕上がり、より手軽に楽しめる盆栽が好まれるようになってきました。

また、都会に住んでいると、マンションやアパート、一戸建てでも庭がなかったりと場所も限られています。



ミニ盆栽は庭のないお宅でも、ベランダなどの小スペースに置いて、インテリアとしても利用でき、ふつうの盆栽より管理が簡単なので初心者にもおすすめです。

ミニ盆栽は片手に乗ってしまうかわいらしさが若い女性にも受け入れられ、草花感覚で手軽に楽しめることから、幅広い年齢層に広がりを見せています。

豆知識

鉢のない盆栽“苔玉”

「苔玉」とは植物の根をケト土や赤玉土などを混ぜて練った土で包み玉の形にして、さらに苔（こけ）を貼って釣り糸などで球状に巻き付けたものを言います。日本伝統の盆栽での「根洗い」の技術を応用したものと言われています。

みずみずしい苔（こけ）は植物を引き立たせ、ほんわりした丸い形はほっと和ませてくれる小さな緑です。

コラム

小さな自然“寄せ植え盆栽”

複数の木や草花を同じ鉢に植え付けたものを寄せ植え盆栽と言います。寄せ植え盆栽は小さな鉢の中に大自然の風景を再現します。使われる木や草花はもともと野や山に生えていた種類が多く、秋に紅葉し、春には花を咲かせ、部屋の中に居ながらにして、四季を感じることができます。

通常の盆栽と異なり、成長が早く、管理も簡単なので、初心者にも取り組みやすく、若者・女性を中心に人気を集めています。



日本には、その季節を象徴するさまざまな風物詩があります。
人々の生活に密着した、緑のある風物詩に出かけてみませんか？

朝顔市



下町の夏の風物詩、朝顔市。中でも入谷の朝顔まつりは有名で全国に知られています。

朝顔が今のような鑑賞用として栽培されるようになったのは江戸時代に入ってからで、文化・文政期(1804～1830)の事です。下谷の植木職人たちが葉も花の形も変化に富んだ、いわゆる変化朝顔の栽培を始めたところ、評判となり一般庶民にまで広まっていきました。

豆知識

朝顔は薬だった？

朝顔は誰でも、一度は育てたことのある身近な植物ですが、日本古来の在来植物ではなく、奈良時代に遣唐使によって中国から渡来したと言われています。朝顔が観賞用として栽培されるようになったのは後のことで、もともとは牽牛子（けんごし）と言われる下剤で、その種を薬として用いていました。

ほおずき市



鮮やかな赤い実を着けるほおずきの鉢植えがいっぱい天井からつるされた店の前で、売り子たちの威勢のいい掛け声が響きます。朝顔市と並びほおずき市も下町の夏を代表する風物詩として欠かせません。

浅草の浅草寺で、四万六千日の縁日に開かれるほおずき市は全国から観光客が訪れ、たいへん賑わいます。

朝顔市とほおずき市は各地で催されています。下町情緒あふれる夏の風物詩にちょっと出かけてみませんか。

コラム

ほおずき遊び

四季にめぐまれている日本では、季節ごとにさまざまな草花を使った遊びが伝えられてきました。

ほおずきの丸い果実をやわらかくもみほぐして中身を取り出し、皮だけにして口に含んで鳴らす風船。

赤い袋の皮をむいて裏返しにして、実に顔を書けば「ほおずき人形」のできあがりです。同じように皮を裏返ししてお尻をひもで結んで、ひげ面を書けば「だるま」になります。

公園やお寺・神社、大学のキャンパスや街道沿いなど、私たちの身近にある巨樹・古木に会いに行きませんか？

イチヨウ



「樹齢数百年の木」というと、どこか遠い山奥にあるイメージでしょうか。

私たちに身近な神社・お寺の境内や公園でも、巨樹・古木と呼ばれる大きな木を見ることができます。何百年もの間、街の移り変わりをずっと見守ってきた巨樹・古木を見に行きませんか？

豆知識

自分のまちの木を調べてみよう

九都県市やその他多くの市町村では、それぞれのシンボルとして「市の木」、「市民の木」などを定めており、ケヤキやイチヨウ、マキなどの大木になる木や、ツバキなど美しい花の咲く木が選ばれています。あなたのまちの木はなんですか？

ケヤキ



木は大きく成長するにつれて、樹種ごとに特長ある「かたち」を見せてくれます。ケヤキは、ほうきを逆さに立てたような枝張りになり、樹皮は鱗のように剥がれ落ちていきます。またイチヨウの垂れ下がる気根は乳房に例えられ、子宝祈願の信仰の対象にもなっています。

スギ



スダジイ



コラム

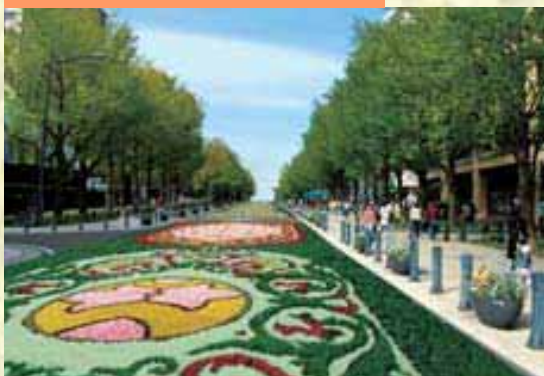
木のお医者さん 「樹木医」

公園などの多くの人が集まる場所の木は、根元の土が踏み固められて樹勢が弱ってしまうことがあります。また病気で腐ってしまった幹や枝は、折れたり倒れたりして通行の危険になります。「樹木医」は、弱ってしまった木の診断、原因の調査、腐った部分の除去などの治療を行う、“木のお医者”さんです。



押し花、花絵、丸太など、緑をつかったアートもさまざま。
あなたも緑のアートを楽しんでみませんか？

花びらを使ったイベント



開港 150 周年を記念して、日本で最初の西洋式街路「日本大通り」（横浜市）において、市民 1,500 人が参加して花びらを敷き詰めました。

出典：横浜市ホームページ

豆知識

古くから伝わる「インフィオラータ」

色とりどりの花びら敷き詰め、花絵を描く「インフィオラータ（infiorata）」は、イタリア語で「花を敷き詰める」という意味があります。

インフィオラータは、200 年以上の歴史があります。イタリアのジェンツァーノ市をはじめ、ヨーロッパの各都市で実施されています。

森の中のアート



森の中は貴重なアートスペースです。野外美術館として、アート作品を展示したり、森の材を使って、作品づくり。
あなたも森に出かけてみませんか？

© GROUP 創造と森の声

コラム

森での展覧会

森での展覧会は、音楽コンサート、パフォーマンス、ワークショップ、子供の遊び場、舞踊、演劇、など様々なジャンルの企画とともに、多様な表現の場になって来ています。

作品づくりだけではなく、親子で森に親しむワークショップなど、多くの笑顔があふれています。



江戸時代から続く歴史あるみどりを訪ねてみませんか？

遠い昔に思いを馳せ、ゆったりと心落ち着くひとときを満喫しましょう。

小石川後楽園



小石川後楽園（東京都文京区）は、江戸時代初期、寛永6年（1629年）に水戸徳川家の祖である頼房が、江戸の上屋敷の庭として造ったもので、二代藩主の光圀の代に完成した庭園です。光圀は作庭に際し、明の儒者である朱舜水の意見をとり入れ、中国の教え岳陽楼記の「（士はまさに）天下の憂いに先だって憂い、天下の楽しみに後れて楽しむ」から「後楽園」と名づけられました。

庭園は池を中心にした「回遊式築山泉水庭園」になっており、随所に中国の名所を名づけた景勝を配し、中国趣味豊かなものになっています。そしてこれらによって湖・山・川・田園などの景観が巧みに表現されています。

向島百花園



向島百花園（東京都墨田区）は、江戸の町人文化が花開いた文化・文政期（1804～1830年）に造られた庭園です。それまで骨とう商を営んでいた佐原鞠塙（さはらきくわ）は、交遊のあった江戸の文人墨客の協力を得て、「民営の花園」を開園しました。

開園当初はウメが主体でしたが、後にミヤギノハギ、ススキ、キキョウなど詩経や万葉集などの中国、日本の古典に詠まれている有名な植物を集め、四季を通じて花が咲くようにしました。

百花園は当時の一流文化人達の手で造られた庶民的で、文人趣味豊かな庭として、大名庭園とは異なった美しさを持っています。

豆知識

徳川吉宗と江戸の桜

江戸時代から続く「みどり」の楽しみ方として、桜の花見があげられます。飛鳥山や隅田川堤などの桜の名所は、八代將軍徳川吉宗が「享保の改革」の施策のひとつとして植えさせたものだそうです。当時、幕府の財政難を解消するために質素・儉約路線を突き進めななかで、江戸の庶民たちに何か楽しみを与えたい、ということで桜を植え、一般に開放したのだそうです。

コラム

“秋の七草”はめずらしい花？

「秋の七草」といえば、万葉集の山上憶良が詠んだ歌『萩の花 尾花 葛花 なでしこが花 をみなへし また藤袴 朝顔が花』に出てくる、ハギ、ススキ、クズ、カワラナデシコ、オミナエシ、フジバカマ、キキョウの7種がよく知られています。昔は秋の訪れを告げる一般的な花だった七草ですが、現代ではキキョウやフジバカマは環境省レッドリスト（日本の絶滅のおそれのある野生生物の種のリスト）に載るほど希少な種となってしまいました。

四季折々の美しい自然を楽しめる環境を大切にしていきたいですね。